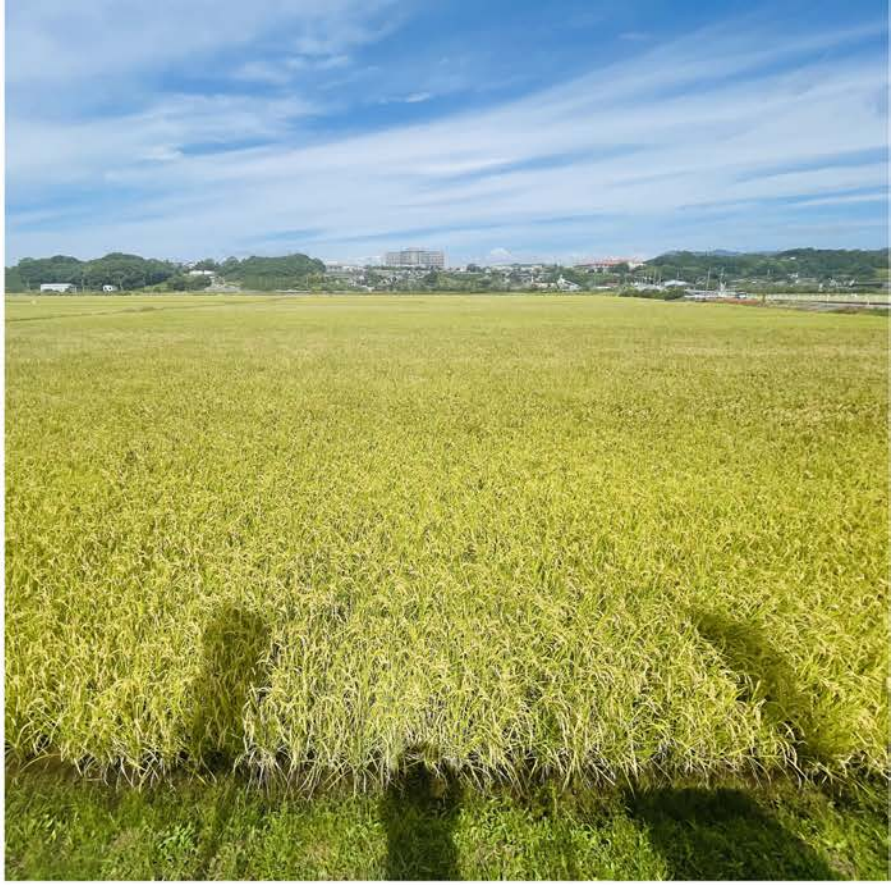
正法寺新聞



ふるさと
失う悲しさ
忘れる空しさ

特集
○正法寺で帰敬式
○これまでの
「行いがわたしを導く時間」
○みんなで作る報恩講へ

2025.1
第25号
正法寺発行

「バカの壁」の著者で有名な養老孟司さんが
最近は自然と自分との繋がりに実感のない子が多いから、
「田んぼを見たら未来の自分だと思いなさい」と言うのだそうです。
米を食べられない方もおられるので、
全員ではないでしょうが、われわれは食べた物によってできている
ということを、感覚的に思い出させてくれる視点です。

スタンプカードに記録しながら
楽しく参加ができます。

あそぶ

おす

みがく

たてる

正法寺で帰敬式

令和六年　十二月五日　十三時半より

執行しました

司会は南無船会濵本さんが初挑戦

帰敬式は本堂で執行します。まずは受付し、肩衣をかけます。南無船会のみなさんがサポートしてくださいます！

受式者には、本山より肩衣・赤本・真宗門徒の生活・バッグが贈られます。

剃刀(とう)の儀(おかみそり)。住職がおひとりおひとりにかみそりを頭にあてる形で行います。

法名伝達。ひとりずつ前に出て、住職より受け取ります

「誓いの辞」は、松並の山田さんが代表で読まれました。

「正法寺で帰敬式」

❶開式の辞
❷真宗宗歌斉唱
❸三帰依文唱和
❹剃刀の儀
❺執行の辞
❻法名伝達
❼誓いの辞
❽法話
❾恩徳讃斉唱

※今年も12月5日に帰敬式執行の予定です。まずは、「行いがわたしを導く時間」に通って準備するのもおすすめです。

住職による帰敬式法話。儀式の持つ意味、今後の生活への願いなどをお話しました。

19名の方が「法名(ほうみょう)」を受けられ、仏弟子としての歩みを始められること、大変うれしく思います。ご希望の方は、今年12月に受式しましょう。

これまでのおこみちを参加者の感想と共におとどけします！

月一報恩講『行いがわたしを導く時間』（略しておこみち）、昨年も多くの方にご参加いただきました。その際の感想をこちらでご紹介します。まずは一度お越しください！参加予約はいりません。（今年も3月からスタートです！チラシは来月配布予定）

命を終える瞬間の切なさ、悲しさ、そして最後に感謝と共に涙が溢れた。

死の体験旅行

子どもの頃に父と一緒に磨いていた事を思い出しました。暑かったですが、集中しているとあっという間に時間が過ぎました。

仏具を磨こう

配合が難しかったですが初めてにしては上手くできたと思います。乾いてからのお香の香り、楽しみです。

お線香を作ろう

すごろくでまなぶ 釈尊の生涯

煩悩カードを読むとまさしく私の心だ！というのがあり、納得。なかなか減らない煩悩をかかえて精進していきます。

花をいけてみよう

山から海へ水の流れのように高さを整えながら、足元は小花や大輪一つ等でかくすなど、ポイントが良く解りました。

令和6年
12月5日 ～12月8日
準備は12月1日からでした

みんなでつくる報恩講へ

おかげさまの心を
思い出す「報恩講」
新しくスタートしました！

仏具のおみがき

準備から片付けまでを当番制にしたり、ぜんざいや精進カレーのふるまいなど、新しくなった「報恩講」。まだまだ浸透していないところもあるものの、新しい風が吹きはじめました!!

おかざり

餅つき

五色幕の準備

お花たて

さまざまな片付け

洗心会活動報告

敬老会を開催しました！

昨年10月20日(日)、恒例の敬老会を開催しました。ご講師は、八女市浄慈寺の島村宣澄先生をお招きしました。先生は現在74歳、来年は敬老会の仲間入りだそう！「杖にたよる生活になりましたが、敬老会にはぜひ参詣し、島村先生の法話を聴聞したい。」という強い願望で出席された方もありました。今夏から秋にかけての酷暑を乗り越え、久しぶりの再会に喜び合いました。

（会長・堀出美智子）

21名の参加者がありました！

ご法話は赤本105ページの和讃についてのお話でした。

九州教区企画

本山報恩講 奉仕団 参加報告

正法寺から2名、奉仕団参加があり、
参加者の木谷さんからご報告が届きました！

この度、十一月二十日から二泊三日の日程で本山報恩講奉仕団として参拝いたしました。初日の音楽法要においては、宗祖七百五十回御遠忌を縁として作られた合唱曲が全国から集った約五十名によって演奏され、御尊前を荘厳。四行単位で三十回繰り返される正信偈の詞が心に響きました。正法寺の夜の学習会から知り得た知識、そして十二年間のお寺に携わってきた時間がフラッシュバック、心の拠り所としている自分を再認識する機会となりました。

同朋会館での法話・講義の中で、三つ印象深いことがありました。第一は、夕時勤行での感話、能登輪島から来られた方が現状の悲惨さを述べられたことです。地震と大水害で何も復旧できていない現状と、本山からの繰り返し何度も何度も支援して頂いていることへの感謝の言葉は、直接当事者の方から聞くものとして大変心揺さぶられました。第二は、雅楽の実演講義です。雅楽は、人間の哀楽喜怒敬愛の六つの心に起源をもつそうです。第三は、御伝鈔の講義です。「御伝鈔」は、親鸞聖人の吉水時代から越後・関東時代の命がけで念仏の道を広められた時代と浄土へ還帰された後までを、上下巻の巻物から御影堂にて厳かに語られるものです。それを絵伝として四幅の絵で描かれているものを、場面を選び説明して頂きました。本山報恩講に奉仕団として参加することは、生きていることを確かめる時間でもあります。同朋会館・九州教区の方々、そして正法寺の方々へ心から御礼申し上げます。

木谷憲祥（諏訪）

本山報恩講期間
2024年11月21日～
11月28日まで
※毎年期間は一緒です

これも仏教用語?!

普段から使っている言葉には
仏教由来の言葉が実はたくさん。
そんな言葉を紹介します。今回の言葉は、

「知識（ちしき）」

現代語の知識は「ある事項について知っていること。また、その内容です。仏教語の「知識」は、情報ではなく「ひと」を表します。特に仏教に縁を結んで下さる導き手のことです。

現代は情報社会と言われるほどに、知識が要求されます。この知識は、この世をいかに上手く生きるかということには役に立ちます。しかし、この世をなぜ生きるのかという問いには無力です。この問いの意味を開いて下さる導き手に遇うことが最も大切だと仏教は教えます。

親鸞は「一切梵行の因、無量なりといえども、善知識を説けばすなわちすでに摂尽しぬ」（『教行信証』）と述べています。つまり、「仏教には覚りをもとめる方法がたくさん説かれているが、善知識という一言を説けば、その中にすべてが摂め尽くされているようなものだ」という意味です。

人間は自分の思い込みで物事を考えてしまう傾向が強いです。この思い込みの眼で仏書を読んでも、自分の思い込みの知識でしか答えを得られません。この思い込みの眼を外部から批判して下さるのが「善知識」です。「善知識」が大切だというのは、それほどまでに人間は思い込みの強い生き物だということを表しているのでしょう。もし親鸞が、師の法然上人に出遇うことがなければ、真宗は開示されませんでした。そうすると私が今日、真宗門徒になることもできませんでした。

武田定光氏真宗大谷派　因速寺住職（東京都）

真宗・入門

報恩講

念仏の教えを聞き、確かめ合い、学び合う、その集まりを「講」といいます。親鸞聖人のご命日を縁に開かれ続けた講。引き続き「報恩講」についてお伝えしていきます。

ベースを作って残しておこう！

親鸞聖人の三十三回忌、本願寺第三代・覚如上人は法要のベースを整えられました。『報恩講私記』（※①）というものを作り、ここから「報恩講」と呼ばれるようになります。念仏の教えを私たちに伝え残してくださった親鸞聖人を敬い、念仏することによってこの恩に報いましょうと勧めています。翌年には親鸞聖人の伝記（※②）を作るなど、親鸞聖人のことを後の世へ伝えようとする強い思いを感じます。その後も、覚如上人の子どもが書かれたものが「報恩講」の次第（プログラム）に加えられることになるなど、念仏の教えと共に、親鸞聖人に関することを形に残そうとの思いはつながり、未来に託されていくのでした。（次回へ続く）

※①『報恩講私記』
報恩講式や式文ともいう。
総礼（合掌）
三礼（仏法僧への敬礼）
如来唄（如来を讃える歌）
表白（趣旨を読み上げる）
親鸞聖人の残した功績を、三つ挙げて讃えるところ。
という流れになっている。

※②『本願寺聖人伝絵』
御伝鈔・御絵伝ともいう。
親鸞聖人の人生を主なエピソードと合わせてまとめた絵巻物。

（文責／法務員　谷）

住職が語る『正信偈』 第25回

道綽決聖道難証　唯明浄土可通入

お釈迦様の説かれたお念仏の教えを正しく理解し、後の世に伝えて下さった七人の高僧、親鸞聖人は正信偈において深い尊敬と恩徳の心をもって、これらの諸師の教えを説いてくださっています。今回はこの高僧達の四番目にあたる道綽禅師のことが語られていく段落に入ります。

道綽禅師は西暦五六二年～六四五年まで生きられた方で、中国の北斉の国、并州に生まれたといわれています。前回までの登場人物である曇鸞大師が亡くなられて二十年後にお生まれになられたということになります。時代としては、曇鸞大師のところで説明した中国の南北朝時代がまだ続いており戦乱の絶えない時代でした。また五七四年には隣国の北周の皇帝が過酷な廃仏政策をおこなっており寺院は破壊され僧侶は還俗させられるという事態が起こっていました。こういった世相や、末法のことが説かれている『大集月蔵経』がインドより伝わり普及していったことから、「末法思想」というものが当時の中国の仏教界では流行していたのです。

「末法思想」というのは、釈尊が亡くなってからの時代を正法・像法・末法の３つの時代わける考え方で、時が経つにつれて時代そのものやそこに生きる人々の心と質が下がっていき、さとることができなくなってしまうというものです。正法はお釈迦様の教えと、それを実践する行と、その結果としての証（さとり）の三つともが正しくそなわっている時代です。像法は正しい教えと行があってもさとりを完成することができない時代です。そして末法は教えだけが残り、人がいかに修行しようとも到底さとることができない時代といわれています。中国では道綽禅師が生まれる十年ほど前に末法に入ったととらえれていました。そのような世相の中、十四歳で出家されるのです。

若くして出家した道綽禅師ですが、禅師が住む北斉の国は五七七年に隣国の北周に滅ぼされます。北周の皇帝はここでも廃仏をおこない、禅師は一度僧侶をやめさせられることになります。北周の皇帝が亡くなり五八一年に隋の国が興ると仏教が復興され、禅師は再び出家するのです。このとき禅師は全てのものが救われると説かれる『涅槃経』を深く研究していかれます。非常に造詣が深く『涅槃経』の講義を二十四回おこなったといわれています。また三十歳ごろになると『般若経』を学び禅学を研鑽されていきます。道綽禅師と呼ばれるのは非常に優秀な禅のお坊さんだからですが、その尊称からも高名さがうかがえます。しかしどんなに学識を深め研鑽を積んで名声を高めても、さとりを得られない身である、煩悩から離れられない身であると自分自身を見つめておられたのです。

そんな中、四十八歳の時、たまたま旅の途中で、曇鸞大師がおられた玄中寺に立ち寄られることになります。そこで曇鸞大師の足跡を伝える石碑を見ることになるのです。そこには高名な曇鸞大師が菩提流支三蔵と出遇う事で苦労して手に入れた仙経を焼き捨て、浄土の教えに帰依された逸話が記してありました。道綽禅師は、智恵才覚も無い私がさとることのできない末法の世において救われていくには、曇鸞大師同様に聖道の教えと決別し浄土の教えにしたがっていくしかないと、そのまま玄中寺ににとどまりお念仏の道を歩むことを決意されるのです。

そのことを親鸞聖人は「**道綽決聖道難証　唯明浄土可通入**」と説かれています。すなわち「道綽禅師は、末法の世においては自力聖道の教えではさとることはできないということを明らかにしてくださり、ただ浄土のお念仏の教えだけが煩悩の身である私たちが歩むべき道なのであると示してくださった」と讃えているのです。